

緯度が低い九州は広葉雑草よりもイネ科の雑草の占有率が高いので、大豆栽培よりも麦栽培の雑草対策が難しい。ただ日本の歴史的背景なのか、水田イネ科雑草用除草剤の開発が進んだ。その農薬テクノロジー転用などにより、南日本の麦栽培の雑草対策は以前よりは容易になったと聞く。

GM技術導入が必要なこれだけの理由

では北海道における広葉雑草は誰が責任を持つのか？ もちろん現場の生産者であり、基本は土壌管理になるが、そんなことは開拓以来70年もやってきて、いまだ誰も100%解決できないのが現状だ。それを認めようとしない夢追い人が多いのも左翼思想が浸透している北海道の風、土、病の特徴である。

除草剤でコントロールしきれなかった雑草は手で取るのか？ 冗談ではない。東京ドーム12個分の50haの大豆畑を手で取っていたら1000人いても1年で終わらない。

その前に炎天下でコツコツと鋤を使って作業をする出面さんと呼ばれる愛すべきおばちゃん存在は、とうの昔に郷土史の片隅に追いやられてしまい、働きの黒竜江省出身の

人でもやりたがらないのが現実だ。その手作業を生産者だけの責任で対応させる、という考えがまかり通るのだから無責任すぎる。

最終的にはしっかりと日本国の登録が取れた除草剤を使うことになる。なぜ仰々しく日本国と書いたのか？

しっかりとした理由がある。この日本国の登録が取れた大豆用、それも直接茎葉に散布できる農薬はほぼすべて海外製であり、使用される米国のマーケット向けに開発されたものである。

日本では、大豆の中の広葉雑草をコントロールできる除草剤は数種類しかない。米国ではその倍以上の数になる。しかもその米国で使用された農薬栽培の大豆もしっかりと日本のポジティブリストに記載され、正々堂々と日本に輸入され日本人の口に入る。ところが、北海道の生産者は同じ農薬を使用できない。

ではなぜ大豆を栽培するのか？多くの作物は何年も連作すると収量や病害虫の影響が出やすくなるのは経験則でわかっている。**本当は機械化しやすい麦栽培の一本でやりたいのが本音であるが、4年も続けて連作するとやはり問題が出てくる。**

そこで考えることになる。大豆と

小麦の栽培面積のリスクが少ないベストな比率を。

最近大豆を1年作り、麦を2年程度作ることにより、過剰で無駄な労働力を排除することができる。

もう一度おさらいをしよう。GM大豆はラウンドアップ（グリホサート）やバスタ（グリホシネート）などの特定の除草剤耐性大豆である。ラウンドアップやバスタは30年以上前から世界中の農場や一般家庭でも販売されている除草剤であり、安全性のひとつの目安である急性毒性は塩よりも死ぬことは難しい。

GM大豆にこの除草剤を開花時期前に2ℓ/haで1回ないし2回使用することでほぼすべての雑草が枯れて、大豆はすくすく成長する。

スーパー雑草という名前を誰かが作った。2000年代に入りラウンドアップに耐性のある雑草が米国の畑に出没したのだ。

ただし、この問題は先ほどの違うタイプのバスタを用いたGM技術で解決された。にもかかわらず壊れたレコードのように、スーパー雑草問題をとやかく言っている**勉強不足の扇動家が活躍できる日本は豊かなのか？**

ところで「雑草をなくして何するの」と聞かれることがある。答えは「楽にしたいから」。こう言う人多く

人たちは「楽だとして、ふざけるな」となる。どうも私の考えていることと違う思考回路の答えが返ってくる。はい、なるほどね。誤解もはなはだしい。

私は雑草管理のリスクや手間をなくして、その余剰の時間を必ずやってくる**2倍、3倍、いや、それ以上の規模拡大をしなければやっていけない大豆栽培に対応するためですよ**、と言いたかったのだ。

自民党支持の共産主義者は現状維持のことしか考えていないので、単純に楽がしたいと考えてしまう典型的な小作人根性の持ち主であり、その末裔たちが祭りごとや政に興じているのが我が日本の現状である。

現在は発展途上国においてもGM技術が普及している。これが回り回って日本の消費者の利益に適用になるはずだ。**GM技術の利**用を国内で推進しなければ、**日本人が発展途上国や米国、カナダの人たちよりも明らかに頭が悪いと証明することに**なる。

おーっと、今月はまじめなことを書いてしまつて「金髪・ブルーアイ」を入れることができなかつたので、次号ではたっぷり楽しんでいただきましょう♡